

授与構文における“公”と所有領域

勝川 裕子

0. 本稿の視点

0.1 現代中国語における譲渡動詞“公 (gōng)”は、周知の通り日本語の譲渡動詞「ヤル」「クレル」のような発話者視点による動詞選択の必要はない。また、日本語の「ヤル」「アゲル」「サシアゲル」等のように授与者と受領者の間に存在する上下関係や発話者の感情的ニュアンスを伝える働きもない。譲渡動詞“公”は＜事物の一方から他方への移行＞¹を専らその意味機能としているのである。

＜事物 (Patient：以下「P」) の授与者 (Agent：以下「A」) から受領者 (Recipient：以下「R」) への移動＞という“公”の意味機能を、事物の所有領域という視点から眺めると、授与者 (A) の所有下・コントロール下にある事物 (P) が受領者 (R) の所有下・コントロール下に移動する、と捉えることができる。換言すれば、事物の所有領域というフィルターを通して譲渡動詞“公”を考えると、＜与えられる事物 (P) の所有領域が授与者 (A) から受領者 (R) へ移行する＞という新たな意味特徴を見出すことができる。これは、「授与」や「譲渡」等のタームが元来有する意味からも、その妥当性は窺い知れる。

0.2 本稿では、まず、これまで論じられることの少なかった譲渡動詞“公”を用いた授与構文と所有領域の関係について、二重目的語を伴う授与構文 (以下、“A 公 RP”) を取り上げ、“委”を用いた授与構文 (以下、“A 委 P 公 R”) との比較を通じて、“A 公 RP”構文の統語的制約が P の所有領域とどのように関連し、文全体がどのような意味特徴を有するのかを明らかにしていく。また、従来の研究では、“公”の補助動詞的用法である“AV 公 RP”構文は動詞の性質によっては“公”を省略することができ (“AVRP”)、且つ意味的にも等価であるとされてきた²が、本稿では“V 公”の“公”に一定の意味機能を見出し、“公”の有無によって文全体にどのような意味的な相違が生じるかについて考察していく。

1. 譲渡動詞“公”の意味機能と“A 公 RP”構文の意味特徴

1.1 現代中国語において、事物の授与を表す二重目的語構文は、“A 公 RP”構文だけではない。“僕[贈る]、沢[売る]、珊[返す]、住[渡す]、弓[手渡す]”のような典型的に[+授与]の意味特徴をもつ動詞は、凡そ二重目的語構文を構成することができる。＜事物の授与＞は二重目的語構文のプロトタイプな意味成分(semantic component)であり、幀蟻烈 1979:233 は「授与」の意味を次のように概括している。(破線は筆者による。)

- 1) 賈壓彭“嚙↗(A)”才“鞭↗(B)”褒圭。
- 2) 賈壓彭嚙↗促嚙呀軸鞭↗促鞭議並麗(C)。
- 3) A 麼強仇聞 C 喇 A 廬卞崛 B。

つまり、「授与」とは①授与者(A)と受領者(R)が存在し、②AからRに与えられる事物(P)が存在した上で、③Aが主体的にPをRに移行させることを表し、この「PをRに移行させる」の部分[+授与]を表す動詞が担っているのである。“A 公 RP”構文では、当然動詞“公”がその意味機能を担っている。具体的に例文を挙げて見てみよう。

- (1) 宸劔杏，低粹基昉阻，公厘眉為超挫仇，厘宸祥購阻宸糾壇，効低指錦嶽仇肇，低心妣劔？《醉赤繁伏》
[こうしよう、君が先ず私に 300 ムーの土地をくれると約束してくれたら、私はすぐにこの店を閉めて、君と一緒に隊に戻って農作業をする、どうだい？]
- (2) 熱！熱音攪諒粬，社戰音公厘熱，厘氏KK艷繁処……《社》
[金！金は問題じゃない、親が私に金をくれなければ、他の人に借りるさ…]
- (3) 癖輝原匯泣烏滑匆頁昉乎議。罷頁厘公阻析繁社勵翠熱。《円咆溺繁》
[それ相応の報酬を支払うのも当然である。そこで私は老人に 5 元をやった。]
- (4) (磨)公式浪才哈栖椎倖繁勵噴坏式繼。《川社廸議延濡》
[(彼は)小喜と案内人に 50 元のチップをやった。]

幀文に従い、事物の授与を表す“A 公 RP”構文を＜事物(P)の授与者(A)から受領者(R)への移動＞と捉えると、例(1)は、与えられる事物(“眉為超挫仇”)が授与者(“低”)から受領者(“厘”)に移行することを表し、例(2)も同様に“熱”(P)が“社戰”(A)から“厘”(R)へ移行することを描写している。例(3)例(4)も同様である。

1.2 “A 公 RP”構文を統語的側面から観察すると、R と P に様々な制約のかかることが分かる。中川1973は、Rに人称代詞以外のものがくることがない³としているが、例(3)(4)のように、普通名詞や固有名詞が用いられることもある。ただしこの場合、Pは通常＜数量詞＋名詞＞の形式をとる傾向にある。例(3′)(4′)のようにRが普通名詞や固有名詞である場合、Pが裸の名詞ではすわりの悪い不自然な表現となるという言語事実がその傍証となるであろう。

(3′) ?器頁厘公阻析繁社熱。

(4′) ?(磨)公式浪才哈栖椎倅繁式繼。

Rが人称代詞や固有名詞のような特定の人物を対象とするということは、換言すれば、不特定の人物には用いられないということに他ならない。従って、どこの誰だか分からない「或る子供」に餌をやったという意味で例(5)は明らかに不自然である。⁴

(5) *厘公阻匯倅頃徨滅。(木村 2002)

1.3 “A 公 RP”構文に限らず、現代中国語において、授与を表す二重目的語構文は直接目的語(本稿の P)が数量詞を伴う傾向が見られる。数量詞を伴う原因については、すでに多くの先行研究が指摘するように、名詞(名詞句)の外界指示性(reference)や情報の新旧度(new/old information)、他動性(transitivity)などの要因が複雑に絡み合っている。古川 1997は、認知言語学的観点から、特に現象文において数量詞限定名詞句が出現する原理について、「中国語は外界認知で＜目立つモノ＞を言語化するとき、その名詞に数量詞という標識(mark)を付け加えて＜目立つカタチ＞で表現する」との仮説をたて、現象文において＜現れるモノ＞＜消えるモノ＞は＜目立つモノ＞として認知的な際立ちを与えられるべく数量詞を伴うという興味深い指摘をしている。

これを本稿の関心に即して言えば、授与を表す二重目的語構文において、与えられる事物(P)は授与者(A)の領域から受領者(R)の領域へ＜動くモノ＞であり、＜目立つモノ＞であると考えられる。従って、＜数量詞＋名詞＞の有標形式をとり、＜目立つカタチ＞で表現されるのであると予測することができる。特に、抽象物としての P が数量詞を伴う理由を、数量詞の計数機能(quantifier)

や類別機能 (classifier)⁵に求めることはできず、以下に挙げる例文から数量詞を落としがたいことから、この予測の妥当性を推し量ることができる。

- (6) 葎焚担繁断汽汽勤溟漸慢，彬墾慢，音公慢匯導梁悲議凜高，音公慢匯
薪損秤議伉，封崛短嗤繁栖葎慢窟竈匯落鮮潑議名連。《社》

[人々は彼女を蹂躪し傷つけるだけで、彼女に一瞥の優しい眼差しも、ひとかけらの同情心も与えず、彼女のために憐憫のため息をつく人さえいないのは何故であろうか。]

- (7) 宸鳥老挫№菜庄弊順嶄議匯キ高亭，公阻膺匯倅鍊奎，膺ヲ佚參朔壅喘
音彭膺議皇玲，状耐匯協音氏莫捲議。《社》

[この芝居はまるで暗黒世界における一筋の光明であり、彼に希望を与えた。彼は今後二度と鼓舞を必要とはせず、覚民が屈服するようなことはあり得ないと信じた。]

2. “A 公 RP”構文と所有領域

2.1 “A 公 RP”構文の P に対する統語的制約はこれだけではない。次の例 (9) (10) に挙げるように、P が所有者を明示して“厘議嚏鼻”や“析藍議嚏鼻”のように<所有者+“的”+名詞>の形式で現れることはない。⁶このような統語的制約の裏には如何なる原理が存在するのであろうか。

- (8) 厘公阻川膨匯委嚏鼻。 [私は李四に傘を一本あげた。]
(9) ?厘公阻川膨厘議嚏鼻。 [私は李四に私の傘をあげた。]
(10) *厘公阻川膨析藍議嚏鼻。 [?私は李四に王さんの傘をあげた。]

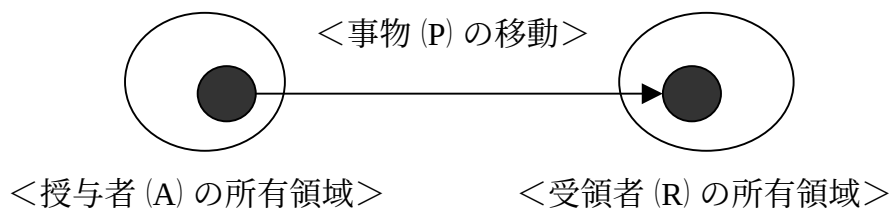
遜首亭 2001 は、“A 公 RP”構文の P が所有者付きの場合、非文となる理由として、例 (11a) と例 (11b) の直接目的語 (本稿の P) は「共に「名詞₁＋“的”＋名詞₂」という偏正構造である」が、例 (11b) の「名詞₁と名詞₂は領属関係にある」のに対し、例 (11a) の「名詞₁と名詞₂は領属関係にない」ことから、「二重目的語の直接目的語は領属性の偏正構造を排除する」と指摘している。

(例文はいずれも遜首亭 2001:8 より引用。例文番号と破線は筆者による。)

- (11a) 厘公宮宮鶴霜議慕淫。 [私は弟にナイロンのカバンをあげた。]
(11b) *厘公宮宮式碯議慕淫。 [私は弟に紅ちゃんのカバンをあげた。]

2.2 与えられる事物 (P) が「領属性の偏正構造を排除」し、常に数量詞と共起するという言語事実は、P が所有者を明示せずともその所属先が自明であることを示唆している。換言すれば、“A 公 RP”構文は、P が主語位置にある A の所有物であることを前提としているのである。従って、この構文を事物の所有領域という視点から眺めると、授与者 (A) の所有下・コントロール下にある事物 (P) が受領者 (R) の所有下・コントロール下に移動する、と捉えることができる。木村 2002 も、二重目的語構文“X 公 YZ”の構文的意味を「＜特定の人物 (X) が、自らの所有下にある事物 (Z) を特定の人物 (Y) に与える＞という意味を表す」と指摘しているように、当該構文は＜授与者 (A) 自身の所有下、もしくはコントロール下にある事物 (P) を授与者 (A) の領域から受領者 (R) の領域へ移行させること＞を意味特徴としているのである。

図1 “A 公 RP”構文の意味特徴



従って、例 (9) のように自らの所有領域にあることが前提になっている事物を“厘議嚏鼻”のように統語的に明示 (overt) するのは不自然であり、また例 (10) のように他者である“析藍”の所有下にある事物を、主体的に (幇蟻烈 1979) さらに別の人“川膨”の所有領域に移すという事態は、“A 公 RP”構文のもつ意味的な制約から逸脱しており、非文となるのである。例 (10) のような表現は“委”構文を用いれば問題なく成立する。木村 2002 も指摘するように、“委”構文は「＜何らかの動作によって、特定の事物の状態を変化させたり、所在位置を移動させたりする＞という意味を表す構文であり、 L_1 の位置にある事物を L_2 の位置に移すという事態に対応する構文」であるため、“析藍”の所有下にある事物“嚏鼻”を、“厘”が主体的に“川膨”の所有領域に移しても何ら問題ない。[+移動] の意味が前面にでる“委”構文では、“A 公 RP”構文のような所有領域に関する意味的な制約は存在しないのである。

(10′) 厘委析藍議嚏鼻公阻川膨。 [私は王さんの傘を李四にやった。]

2.3 また、“僕、沢、珊、住、弓”などは“公”と同様、[+授与]を表す典型的な動詞であり、二重目的語構文を構成することができるが、“公”とそれ以外の[+授与]の意味を有する動詞とは、その表し得る意味が微妙に異なるようである。以下の例を比較してみよう。

- (12) 厘奚将僕慢匯周谷卅，慢音辺。

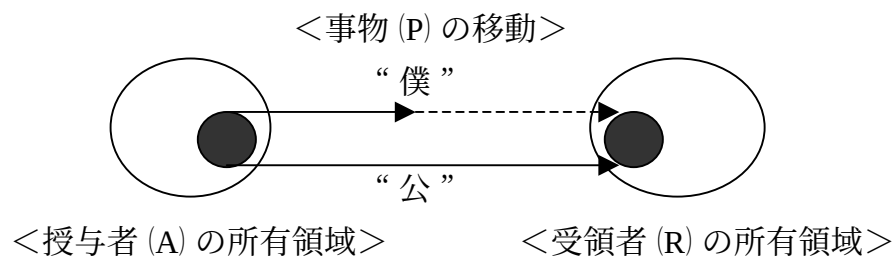
[私はかつて彼女にセーターを一着プレゼントしたが、彼女は受け取らなかった。]

- (13) ?厘奚将公慢匯周谷卅，慢音辺。(関 2001)

[私はかつて彼女にセーターを一着あげたが、彼女は受け取らなかった。]

共に[+授与]を意味機能とする“僕”と“公”にこのような差異が生じるのは何故であろうか。これは受領者(R)に事物(P)が到達したか否かに他ならない。即ち、例(12)の“僕”は「プレゼントする、贈る」の意味で、[+授与]の意味を表すものの、“匯周谷卅”(P)が“慢”(R)に到達したか否かについては統語的には中立([±到達])であり、文脈などによって決定される。一方、“公”の[+授与]には[+到達]の意味まで含意されており、“匯周谷卅”(P)は“慢”(R)に到達していると理解され、従って後節の“慢音辺”と矛盾するため、例(13)は不自然であると判断されるのである。

図 2



2.4 ここまでの考察をまとめてみる。まず、事物の「授与」とその「到達」を原義とする譲渡動詞“公”は<事物の一方から他方への移行>を専らその意味機能としている。授与者(A)と受領者(R)が存在し、同時にAからRに与えられる事物(P)が存在する“A 公 RP”構文は、このような譲渡動詞“公”の意味機能を受け<事物(P)が授与者(A)から受領者(R)へ移動し到達する>という意味を表し、更に事物の所有領域という視点から眺めると、当該構文は<授与者(A)自身の

所有下、もしくはコントロール下にある事物 (P) を授与者 (A) の領域から受領者 (R) の所有領域へ移行し到達させる＞という意味特徴を見出すことができる。

次章では、このような“公”の意味機能が、“公”の補助動詞的用法（以下、“AV 公 RP”）において、どのように反映されているかについて考察を試みる。

3. “AV 公 RP”における“公”の統語的、意味的役割

3.1 “公”を用いた授与構文には、“A 公 RP”構文の他に、補助動詞的な用法（以下、“AV 公 RP”）や介詞用法（以下、“A 公 RVP”）が存在する。また前章で言及したように、[+授与]を表す動詞は“公”を用いなくとも、二重目的語を伴い事物の授与を表すことができる（以下、“AVRP”）。従って本稿では、一文中に A、R、P の三つの意味成分が出現する授与構文として、i) “AVRP”構文、ii) “AV 公 RP”構文、iii) “A 公 RVP”構文の三タイプを取り上げる。

幘蟻烈 1979 は、[+授与]の意味特徴をもつ動詞に“沢”類、“篠”類、“亟”類の三タイプを挙げ、[－授与]である“慨”類とは区別している。更に、本来的に[+授与]の意味特徴を具える“沢”類は、“篠”類及び“亟”類⁷とは統語的な振る舞いも異なり、両者は“AV 公 RP”構文を共通項として、相補的な関係にあることを指摘している。例 (14) から (17) は幘蟻烈 1979 に従い、成立する授与構文と動詞の意味特徴との関係をまとめたものである。

(14) “沢”類 … 他に、“僕、珊、弓、住”など [+授与]

- i) 磨沢厘匯匿挫焼。 [彼は私に好酒を売った。]
- ii) 磨沢公厘匯匿挫焼。 [彼は私に好酒を売った。]
- iii) *磨公厘沢匯匿挫焼。⁸

(15) “篠”類 … 他に、“祉、窟、容呪、初府”など [+授与]

- i) *厘篠慢匯倖淫骨。
- ii) 厘篠公慢匯倖淫骨。 [私は彼女に小包を郵送した。]
- iii) 厘公慢篠匯倖淫骨。 [私は彼女に小包を郵送する／した。]

(16) “亟”類 … 他に、“滬、藻、勗”など [－(+)授与]

- i) *厘亟磨挫叱撃佚。
- ii) 厘亟公磨挫叱撃佚。 [私は彼に何通も手紙を書いた。]
- iii) 厘公磨亟挫叱撃佚。 [私は彼に何通も手紙を書く／書いた。]

- (17) “慨”類 … 他に、“震(夕軀)、岫(谷世)、穴(世捲)”など [一授与]
 i) *慢慨厘挫謹暇。
 ii) *慢慨公厘挫謹暇。
 iii) 慢公厘慨挫謹暇。[彼女は私にたくさんの炒め物料理を作る／作った。]

3.2 このように、現代中国語における授与構文はその動詞の性質により適当な構文が選択されるわけであるが、ある動詞類が構成可能な構文はひとつとは限らない。従来、複数の構文において成立可能な場合、基本的にその表す意味は等しく、どの構文を選択するかは任意 (optional) である⁹とされ、特に“AVRP”構文は、「“AV 公 RP”構文の緊縮形式」(幘蟻烈 1979:246)であり、「動詞が“公”の力を借りずに事物の授与を表す構文」(嫖荻臭 1999)であるとされてきた。しかし、例(18)のような“沢”類動詞を用いた ii) 型の二重目的語構文において、Rが固有名詞の場合、“公”を省略すると不自然になると判断するインフォーマントも多い。また、“委”構文を用いてPを前置するような例(19)は、“公”を落とすことはできない¹⁰ことから明らかなように、同一動詞類における構文選択が完全に任意的であるとはいいがたい。

- (18) 析殻弓公^{ドル}徨匯叱^フ。《台葉^{ドル}徨》[老程は祥子にタバコを一本手渡した。]
 ⇒ ?析殻弓^{ドル}徨匯叱^フ。
 (19) “公，宸頁低議晒刮潤惚。”孱訓歎委晒刮汽弓公仍争激。(杉村 2000)
 [「ほら、これがあなたの化学検査の結果。」鄧繁梅は化学検査報告書を謝凌楓に手渡した。]
 ⇒ *孱訓歎委晒刮汽弓^{ドル}仍争激。

3.3 “AV 公 RP”構文における補助動詞成分“公”は如何なる意味機能を有するのであろうか。関 2001 は“AVRP”構文(例(20))と“AV 公 RP”構文(例(21))を比較考察し、“AV 公 RP”構文における R が統語的に必要不可欠な成分であることを指摘している。(例文はいずれも関 2001)

- (20a) 厘僕磨匯云慕。 [私は彼に本を一冊贈った。]
 (20b) 厘僕磨_____。 [私は彼に贈った。] (意味の明確性を欠くが成立可能)
 (20c) 厘僕_____匯云慕。 [私は本を一冊贈った。]

- (21a) 厘僕公曆匯云慕。 [私は彼に本を一冊贈った。]
 (21b) 厘僕公曆_____。 [私は彼に贈った。] (意味の明確性を欠くが成立可能)
 (21c) *厘僕公_____匯云慕。

例 (20c) が成立するのに対し、例 (21c) が成立しないという言語事実は、“AV 公 RP”構文の“公”が強く R を要請する性質をもつことを示唆している。

更に、例 (22) (23) における動詞“飯 [投げる]、餅 [蹴る]”は事物の移動を表すのみであり本来 [一授与] ではあるが、これが事物の授与の手段として表現されるとき、“公”と結合して受領者 (R) を導くこととなる。動詞“飯、餅”に“公”が付加されると、本来存在しない特定の受領者 (R) (ここでは“曆、藍励”) が不可欠な成分として顕現することとなるのである。

- (22) 仟麼繁飯公曆磯翠倫遊，出曆“菜惶！”
 [新しい主人は彼にトウモロコシの饅頭を半分投げ、「黒子！」と呼んだ。]
 (23) 曆餅公藍励匯倅白。 [彼は王五に球を蹴った。]

このように、統語的側面から“AV 公 RP”構文を考察すると、当該構文における“公”は受領者 (R) を必要不可欠な成分として要請し、特定の受領者に対する特定の授与行為を表す構文であることが分かる。また、例 (22) (23) のように動詞が本来的に [+授与] の意味を具えていなくても、「事物の外向きの移動を引き起こす」¹¹ という意味特徴を有する動詞は、“AV 公 RP”構文を構成することができるが、これは [+移動] の到達先が“公”によって明示され、[+授与] の意味が顕在化したためであると考えられる。“AV 公 RP”構文は＜ある動作行為 (V) を通して、事物 (P) が授与者 (A) の領域から受領者 (R) の領域へ移動し到達した>ことを表す構文であるとその意味特徴を定義することができる。

3.4 葡社賛 1999:98-99 は、認知言語学的な立場から“AV 公 RP”構文を考察し、当該構文において“V 公 R”が隣接するのは、事物の移動と到達がひとつの連続した過程として捉えられているからであり、“公 R”が動詞に後置するのは、R が動作の終点 (destination) であると認識されるからであると指摘している (“ㄗ惣圻夸”)。葡文のいう「R が動作の終点」とは、本稿で言うところの「受領者 (R) の領域への移動と到達」に他ならない。

- (24) ??厘奚将僕公慢匯周谷卅，慢音辺。(葡社賛 1999)

例 (24) が非文 (もしくは容認度の極めて低い文) と判断されるのは、図 2 で示した通り、事物の到達に無関心な動詞“僕”に＜受領者 (R) の領域への移動と到達＞を意味機能とする“公”が付加されることにより、事物“匯周谷世”はすでに受領者“慢”の所有下にあると理解され、後節の“慢音辺”と抵触するからである。また、例 (25) と例 (26) を比較した場合、例 (26) は時制に関する情報が無いにもかかわらず、已然の事態であると認識される。これは“公”の付加により、事物 (“匯閤色携”) が既に受領者 (“磨”) に到達しているという読みが強まるためであると考えられる。

- (25) “厘僕低匯劔叫廉，厘參念基昉僕低議。”《社》

[「あなたにあるものを贈るわ、前あなたにプレゼントするって約束したから。」]

- (26) 嗤繁翌忽指栖僕公磨匯閤色携，磨參葎頁映一，委映迅戰議討脅価篤阻。《律廓》

[外国から戻った人が彼にコーヒーを一缶贈ったが、彼は (これを) かぎたばこだと思い、(コーヒーをかいで) 鼻の穴の皮を擦りむいてしまった。]

4. 結び

本稿では“公”を用いた二重目的語構文を取り上げ、“公”の意味機能と P の所有領域について考察した結果、以下の点が明らかとなった。

まず、“A 公 RP”構文における譲渡動詞“公”の表す「授与」とは、＜与えられる事物 (P) が授与者 (A) の領域から受領者 (R) の領域へ移行し到達する＞ことであり、事物の到達には無関心な“僕”とは区別される。また、事物の所有領域という視点から眺めると、当該構文は＜授与者 (A) 自身の所有下、もしくはコントロール下にある事物 (P) を授与者 (A) の領域から受領者 (R) の所有領域へ移行し到達させる＞という意味的制約を背負っており、従って他者の所有領域に属する事物を A が主体的に移動させるような“*厘公阻川膨析藍議嚏鼻。”は非文と理解されることを指摘した。

このような“公”の意味機能は、“公”の補助動詞的用法である“AV 公 RP”構文においても反映されている。当該構文における“公”は、事物の受領者への到達が顕在化された表現であり、本稿では“AV 公 RP”構文を＜ある動作行為 (V) を通して、事物 (P) が授与者 (A) の領域から受領者 (R) の領域へ移動し到達した＞ことを表す構文であると定義した。

註

- 1 杉村 2000: 64－66 参照。
- 2 “AVRP”構文は、従来、「“AV 公 RP”構文の緊縮形式」(幘蟻烈 1979: 246)、「動詞が“公”の力を借りずに事物の授与を表す構文」(標荻臭 1999)のように位置付けられている。
- 3 中川 1973 は二重目的語文<SVOO>において、間接目的語に人称代詞以外のものがくることはなく、“*厘公川膨匯云慕。”はまったく変であり、“厘公磨匯云慕。”としなければならないと指摘している。しかし、実際には少数ではあるが固有名詞が用いられることもあり、皆無とはいえない。
- 4 木村 2002: 65 の指摘による。
- 5 数量詞の機能についての詳細は、大河内 1985 を参照。
- 6 例 (9) (10) については、インフォーマントチェックを行った際、“*厘公阻川膨 {厘議／析藍議} 嚏鼻。”を「成立する」と判断した者もいた。しかし、管見の限り、このような P が所有者を明示して<所有者＋“的”＋名詞>の形式で現れる例をコーパス等で検出することは出来なかった。また、“把”構文 (“厘委 {厘議／析藍議} 嚏鼻公阻川膨。”) で表現する方がより自然であると指摘を受けた。
- 7 幘蟻烈 1979 は“篠”類及び“亟”類の [+授与] の意味は、“嗤扮竈^⑬，嗤扮音竈^⑬”とし、本来的に [+授与] の意味をもち、i) 型、ii) 型の授与構文が共に成立する“沢”類とは区別している。例えば、“篠”類は本来的に [+授与] の意味を具えてはいるものの i) 型の授与構文を構成することはできず、また“亟”類は本来 [-授与] ではあるが、組み合わされる賓語によって [+授与] の意味が具わる。詳細は幘蟻烈 1979: 240－242 参照。
- 8 “僕”も典型的な“沢”類動詞であり、本来的に [+授与] の意味を表すが、「届ける」という [+移動] の意味が強く前面に出されると iii) 型の構文で表現され、“?厘肇僕磨匯云慕。”と言うよりも“厘肇公磨僕匯云慕。”と言う方がずっと自然に聞こえる、と杉村 2000 は指摘している。“寄燕菱械械彭慢，公慢僕勞，僕叫廉肇。”《社》において iii) 型が選択される理由についても同様に解釈することができよう。
- 9 幘蟻烈 1979 は動詞の性質により、どの構文が選択されるかについて詳細に論述しているが、複数にわたって成立可能な構文については、置換操作による検証に留まり、構文ごとの意味の相違については言及していない。
- 10 杉村 2000: 65 の指摘による。
- 11 詳細は、杉村 2000 参照。「事物の外向きの移動を引き起こす」動詞 (KICK 型動詞) としては、この他にも“卿、胞”などが挙げられている。

参考文献

- 川匠協 1984 <褒塩鞘窃侏蚩裂>，《囂隈寫梢才冥沫》(屈)，27－40 句。
- 遜首苧 2001 <嶺忽囂囂隈縮僥嶺倣購廣議囂呐^{⑬TEL}>，《中国語学》248 号，1－16 頁。
- 葡社贅 1999 <“壓”付鞘才“公”付鞘>，《嶺忽囂獵》及 2 豚，94－102 句。

- 嫖荻臭 1999 〈㊦旗查囂議褒式麗潤更塤〉,《嶄忽囂獵》及 3 豚, 175—184 匈。
- 幘蟻烈 1979 〈嚙強簡“公”𠂔購議鞘隈諒𦰇〉,《圭互》及 2 豚, 231—247 匈。
- 幘蟻烈 1982 《囂隈讐𦰇》斌曆咫慕鋼。
- 木村英樹 2002 「Z の所有領域」,『中国語』 3 月号, 内山書店, 65 頁。
- 杉村博文 2000 「“公”の意味と用法」,『中国語』 2 月号, 内山書店, 64—66 頁。
- 関光代 2001 「“V 公”文の意味特徴に関する考察」,『中国語学』 248 号, 153—167 頁。
- 中川正之 1973 「二重目的語文の直接目的語における数量限定語について」,『中国語学』 218 号, 19—22 頁。
- 古川裕 1997 「数量詞限定名詞句の認知文法—指示物の〈顕著性〉と名詞句の〈有標性〉—」,『大河内康憲教授退官記念 中国語学論文集』, 東方書店, 237—266 頁。